加賀藩の武士階級

一般的に、侍は江戸時代（1603—1867）の社会で高い地位を占めていました。しかし、彼らに許容されるライフスタイルは、彼らの階級ごとに大きな違いがありました。なによりも階級が、扶持、居住地、住居、衣服、仕事、作法を決めていたのです。

江戸時代初期には、加賀藩（金沢を中心とする封建時代の石川）では上層の氏族間の権力闘争による混乱がありました。五代目の大名（領主）である前田綱紀（1643—1724）の時に、武士の階級が明確になりました。大名を除いて、6つの侍階級が設立されました。

もともと強大な地位にあった一族は、その地位を維持しました。このグループには8つの氏族がいたので、彼らは「八家」と呼ばれるようになりました。八家階級は、大名の親戚だったり、加賀藩の初期に多大な貢献があったりした者で、藩の政治を合議で動かしていく重要な職務である「年寄」として仕えました。彼らは最も広大な土地と最大の扶持を与えられました。これらの土地のうち最大のものは本多家であり、続いて長町の長家が続きました。すべての氏族は1万石以上を持っていました（石は米を測定する単位で、武士の所得を示すために使われていました。だいたい180リットル、あるいは1人の大人が1年に食べた米の量にほぼ相当しました）。他の藩の場合、そのようなレベルの財産を持つのは、だいたい大名だけでした。このことから、加賀藩の繁栄ぶりがたやすく見て取れます。

八家の下には「人持組」階級がありました。彼らの扶持は1,000～14,000石でした。このランクには60～100の家がありました。この中で、富が豊富な者は「家老」（上級の役人）であり、富の少ない者は「若年寄」（その下の役人）と呼ばれていました。どちらも、彼らの上にいる年寄よりも多くの実務上の責務を担っていました。

このように、加賀藩の上流は、最高位の侍たちで構成されていました。しかし、行政的な仕事の大半は、中位の「平士」が担っていました。加賀藩には約1400の平士がおり、他の階級よりも多かった。

彼らはしばしば行政上の役割を担い、裁判所で治安判事として働いたりしました。また、軍事作戦の際に騎兵隊を形成したりもしていました。

平士の階級の下には 60～350 石の扶持を受け取る「与力」があり、その下には「御徒」がありました。彼らは武家階級でしたが、これらの階級は大名と直接交流する機会はほとんど、あるはまったくありませんでした。与力と御徒は、通常、奉行所といった場所で職員として働いていました。

加賀藩の侍の最下位は「足軽」（歩兵）です。江戸時代の平和時には、足軽は門番や飛脚（宅配者）として働いていました。他の地域では、足軽は侍階級だとみなされなかった場合もあるようで、さらに、狭い長屋で住むことが多かったようです。しかし、比較的繁栄していた加賀藩では、庭が付いた一戸建ての住居といった、珍しいインセンティブと快適さが与えられていました。